

私たちが暮らすまち 「大窪」をサルク!

「大窪の歴史のはじまり」

大窪村とは、江戸期から明治22年までの村名である。熊本藩領の飽田郡にあり、村高は「寛永郷帳(村の明細書)」には二二二石余(一石＝米に換算すると150kg)と記載されているから、今に換算すると33,300kgにあたり、お金に直すと10kg5千円として1千7百万円程度の収益になる。

(郷帳とは江戸幕府が国絵図と共に編集したもので、一国ごとに村名・村高を書き上げた帳簿のこと)

明治9年の「群村誌」によれば、田一二町九反余、畑二二町六反余、戸数五六戸、人数二九二人、馬五一頭、物産は穀類のほか甘藷、蘿蔔(スズシロ＝大根)、茄子、南瓜(なんきん＝かぼちゃ)柿などで、民業は、農家五十戸、大工二戸と記されている。明治二二年四月町村制の施行にともない、清水村に、その三年後、飽田郡と託麻郡が合併し、飽託郡清水村大字大窪となる。

大窪の地名が初めて記されるのは、その前の鎌倉時代(一一八五年～一三三三年)だそうで、大窪の地に人が暮らしていたことが具体的に書かれている。

しかし、弥生式墳墓をもつ檜山遺跡が存在したことから考えれば、弥生時代(紀元前10世紀頃から紀元後3世紀中頃)には人が住み着いていたのではないのだろうか。

縄文時代晩期にはすでに水稲農耕が始まっていたことを合わせれば、今も田畑の耕作地など、その面影が残っている。

明治6年の地租改正まで、大名・旗本の収入および知行や軍役等諸役負担の基準とされ、所領の規模は面積ではなく石高で表記され、また、農民に対する年貢も石高を元にして徴収されていた。

現在旧国道3号線の大窪バス停から200mほど植木方面に進むと、右手にスーパ―が見えてくる。その反対側に「暮ノ坂」の道標があるが、この道標から坂下集落に続く坂道が「清正公日暮れの坂」と呼ばれ、道標には「是より左きとめ通きちじこゑ たかせのみち」と刻まれている。

大窪で生まれ、大窪で育ち、大窪で暮しているにも関わらず、大窪の歴史を知らなかった筆者は、皆さんと一緒に大窪をさるき(肥後弁＝歩く)たいとの思いで、その歴史と名所・旧跡を辿ってみた。角川日本地名辞典に「おおくぼ(大窪)」という地名が記されていた。

「北西部は京町台地の北端に位置し、その台地から大きな開析谷が当地の中央部から東に広がる。東部は坪井川右岸の氾濫源。地名は大きな窪地の意にちなむという。弥生式墳墓を持つ檜山遺跡があり、宇高笠の観音堂前には享禄4年銘の板碑がある。」と紹介されている。

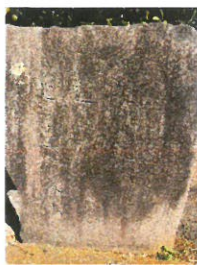
おそらく、今の市中心部から京町方面を望んだものだろう。享禄4年との板碑からは、一五三一年室町時代にあたる。

NHKの大河ドラマ「麒麟がくる」に出てくる將軍足利義昭の父、足利義晴の時代といえど何となく当時の様子が瞭に浮かんでくるから不思議なものだ。

(次回は、近代の大窪と史跡巡りを予定しています。)

寄稿

大窪自治会副会長 大谷賢二



暮れの坂道標